

Другая Жизнь

トリーフォフ

井上怜子 訳

彼女の人生



訳者 井上伶子

1952年岡山県生まれ。早稲田大学大学院ロシア文学科修士課程修了。1985年から88年までモスクワに在住。
現在、フリーの通訳、翻訳家。

現代のロシア文学 第二期第五巻
彼女の人生

一九九〇年七月三十一日 初版発行 ©

著者 トリーフォノフ Ю. Трифонов

訳者 井上伶子

発行者 浅川彰三

発行所 株式会社 群像社

〒101 東京都千代田区猿樂町二一三一

振替 東京四一九五九四三

電話 (〇三)二九一六一五三

印刷・製本 岩城印刷株式会社

電話 (〇三)五七九一〇〇六

万一、落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

ISBN 4-905821-85-1 C0097

Другая Жизнь

トリーフォノフ

井上怜子 訳

蘇工業学院图书馆

藏书章

彼女の人生



彼女の人生

群像社

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ブックデザイン／宮下佳子

Ю. Трифонов

Другая Жизнь

彼女の人生

ア
ー
リ
ヤ
に
捧
ぐ

そしてまた、真夜中に目が覚めた。今では毎晩のように、まるで誰かが決まってその時間に意地悪く突つき起こしているように——考えなきやだめよ、理解しようとしなくちゃ！彼女にはできなかった、自分という存在そのものが、自分を辛くさせるだけのものではなかったのだから。それでも、目覚めさせるものは執拗に要求してくる——わかろうとしなくちゃ、何か意味があるはずよ、誰かが悪いはずよ、いつも悪いのは身近な人たち、これ以上生きていけないわ、死のう。ただこれだけは知りたい、私に何の罪があるっていうの？それからもうひとつ、人に聞かれては恥ずかしい、胸の奥に秘めた思い——本当にこれで私のすべては終わりなのかしら？「何てばかなんだろう、私は。娘がいるのに死のうだなんて」

それでも彼女は死のことを、何か嫌なものだけれども、いつかは経験しなければならぬ避けられないもの、たとえば、手術を受けるために入院しなければならぬ事態といった程度に軽く考えていた。死のことを思いめぐらす方が、追憶にふけるよりもずっと楽だった。追憶には痛みがつきまとうけれど、こっちの方はたわいない束の間の瞑想ですむから。そう、それはこんなふうに始ま

る。いつだったか、いぶん前のこと、あの人は博物館で給料を受け取ると、たいてい職場の隣りにある「ヘセヴァン」で一杯ひっかけから帰ってきてたわ。そうそう、フョードロフに連れて行かれちゃって遅くなったこともある。いつもすぐベッドに横になると、一分もしないうちにもう眠り込んでた。でも必ず、今の彼女のように、夜中の三時か四時頃に目をさましたものだ。引きずるようなスリッパの音を立てて台所に行き、水を飲んだり、冷蔵庫のものを出しては飲んだりするので、眠りを邪魔されてしまう彼女は腹を立てて、うつらうつらしながらも罵ったものだった。起こされてしまったときなどは、憎らしくさえなった。「何てエゴイストなの！ あなたって」

彼の方はといえば、酔っていることを隠し、機転をきかせてうまくその場を取り繕ったものだ。たいした役者だった。彼女は匂いにも充血した目にも気づかず、「もうくたくただよ」という言葉を真に受けて優しくいたわり、大急ぎでベッドの用意をする。彼はドサッと音をたててベッドに倒れ込むといびきをかき始める。でも、夜の明けるずっと前に目を覚ましては、必ず尻尾を出してしまふのだった。今の彼女と似ている、追憶と心の痛みが、彼女のお酒ではあつたけれど。昼間はそれを隠していた。誰にも気づかれなかつたはずよ——職場でも、家でも、イリンカにも、姑にも。姑にはなおさら、あの人に気づかれたら痛みが増してしまうから。昼の間、彼女は自分の持てる力の限りを尽くして隠し通したけれど、夜になるともうだめだった。

あの人は時々、まったくの素面しちふなのに、どういうわけだか、夜中に目を覚ますことがあつたわ。これはもうどうかしていた。年寄りじゃないんだもの。不眠症なんて年寄りのものよ。彼女は眠り

が浅いほうだったので、彼が溜息をつき、寝返りをうちはじめるともう目が覚めてしまっていていらした。特に時計を見るとき——寝具の入っている箱の蓋の上から時計を取って目元に近づけるのだけれど、彼はきまって金属製のバンドを箱にぶつけて音をたててしまうのだった。このちょっとした音で何度言い争いになったことやら。腹が立ってしかたがなかった。あんまりばかりで、どうしてもうまくいかない。ほんのちよつとどこかが、たとえばその小さなバンドの端があたっただけで、夜のしじまのなかではカチャッという金属音がはつきりと鳴り響いてしまうのだった。ずいぶん前から（彼が溜息をつきはじめるとすぐに）目を覚まし、息を殺して、心臓の縮む思いでこの音を待ち構えていた彼女は思わず身震いしてしまう。

姑はひとつ屋根の下で、ずっと彼女と一緒に住んでいた。どこに身を寄せることができただろう。

この女は、息子が心臓発作で去年の十一月に四十二歳の若さで死んだのは嫁のせいだと固く信じていた。一緒にやってゆくのは気苦労なことだったから、できれば家を出て、きっぱりと別れてしまいたかった。でも、それを押し止める事情があったのだ。姑はひとり身だったし、十六歳になる孫娘のイリンカと別れてしまうと、縁もゆかりもない人たちのなかで死をむかえるはめになることは分り切ったことだったから（姑の妹も姪も自分のところへは呼び寄せたくないふうだったし、アレクサンドラ・プロコーフィエヴナの方も同意しなかっただろう）。それに、オリガ・ワシーリ

エヴァは娘のことも考えてみなければならなかった。イリンカはおばあちゃんが好きだったし、おばあちゃんがいなくなれば、まったくのほったらかしになってしまいそうだった。あれやこれやが解きほぐしがたく無情にからみあって、出口はないような気がした。夜中に目が覚めて、絶望に頭をかかえても、夜が明ければ家を出て、逃げ出して、姿をくらましてしまえばいいんだわ。彼女はできるだけ頻繁に出張に出かけるようにした。それが良くないことであることも、自分の弱さであることも、今のイリンカには自分が前に必要であることもよく分かつてのことだった——彼女にもイリンカは必要だったから、汽車に揺られながら娘への思慕に悩まされ、一日でも早く帰ろうと思い、毎晩五ルーブルもの長電話をかけるのだけれど、いざ帰ってみれば、母親の私がいなくても自分のことにかまけて結構楽しくやってたんだ、と気づかされる。心の痛みは増すけれど、それで少しはほっとした。はじめから救いなどないことは分かっているのに、また出かけていって救われなくなる。ああ、この老婆がどこか遠くに住んでいてくれれば、どんなにか不憫に思い、大事にしてあげるのに！ でも、このアパートの部屋、この狭い廊下——セリョージャの打ちつけた外套かけの下に置いてある木箱の中に、履き古された室内履きが放り込まれたままになっているように、過ぎ去った生活の歲月がひとつひとつびたりとくつつきあって、臆面もなく、あからさまにひしめきあっているここには、この狭さと濃密さのなかには、憐れみの余地などありはしなかった。姑は、こんなことも言っていたのだ。「あなた、前にはこんなクレンデリキ（訳注：ドイナツ型の牛乳・バター入り自販機）買ったりしなかったわね。どこで手に入れたの？ キーロフスカヤ通り？」こういう一言

が、少しずつたまっていた憐れみの情をいっぺんに吹き飛ばしてしまふ。そう、息子にはクレンドリキを買ってやるなんてことはなかったのに、今になって、自分のために買い始めたって言いたいね。こうした煩わしさが、本当につまらない、笑止千万なその言いぐさが、鉄槌のようにオリガの心を傷つけた。だって、これこそあの女の底意地の悪さなんだし、いびりなんだもの。

同じような辛い思いは、テレビの一件でもあった。ずっと前のこと、まだセリョージャが生きていた頃から、時代遅れの拡大鏡付きの旧式テレビを新しい、大きなテレビに買い替えたくて、お金をためていた。オリガ・ワシーリエヴナはしょっちゅうかんしゃくを起こしていた——そんなことすべきじゃなかったのかもしれないけど、どうしろって言うの、今となっちゃどうしようもないわ——正直、いらいらの原因は多々あったわけだから、どうしても抑えられなくて、わけもなく、不当なかんしゃくを起こしていたのだった。あれこれその原因を思い出すのも、今では辛い。それもあの人が何もかも忘れて、何時間でも好きなスポーツ番組を見てたりしたからよ。緑色のソファに深々と腰をおろして足を組み、タバコをくわえて、魚をあしらった丸い灰皿をそばの床に置く——お尻に根が生えたみたいにな、何を聞いても、何を怒鳴っても返事がない。だけど、どうしてそんなにぶつづけに見てるの？　どれもこれも面白いわけじゃないでしょう？　僕は休んでるんだよ！　いったい僕に休む権利はないっていうのかい？　その怒り方はちょっとばかりわざとらしくった。自分が仕事でひどく疲れてるってことをみんな心しておくべきだって調子だったわね。

実際疲れていたし、厭なこともあったのだ。でも、誰にだって嫌なことはある。セリョージャに

は辛抱が足りなかった。それに、隠し立てをして、それが後になってばれてしまうということがたくさんあった。彼女は嫌な目に会うと人にしゃべって、気を軽くするタイプだったけれど、彼のほうは失敗を隠し、それを恥じるタイプだったのだ。そんなときにはテレビの前で、本音半分、冗談半分で、不平を鳴らしたものだ。

「みなさん、ぼくの神経細胞は休息を必要としています。犬は草を食^はみ、インテリゲンツィアは音楽を聴きます。で、僕はスポーツ番組を見るといふわけ——これが僕の治療法であり、ぼくの臭素、ぼくの「アルカリ塩鉱泉水」といふわけです。あんたたちの物分かりの悪さなんかくそくらえだぜ、みなさん……」

いつものおどけぶりだけれど、アレクサンドラ・プロコフイエヴナはむきになって息子の守りに出る。時には息子の後押しをしようと、ソファに並んですわって、アイスホッケーやバレーボールの観戦をした——何だっていいんだから、あの女^{ひと}にとっちゃどっちだっていいんだから——。息子ともったいぶって意見をかわしているのを聞いていると、オリガ・ワシーリエヴナは思わず吹き出しそうになる。それとなく分からないように——でも、オリガ・ワシーリエヴナには分かるように——セリョージャがアレクサンドラ・プロコフイエヴナをからかってみせることもよくあったけれど、当の本人はスポーツは本当に面白いわねという態度をかたくなに崩さない。そうそう、三、四十年ほど前には、この女^{ひと}、大の旅行好きだったんだわ！ ついこの間だって、カーキ色の時代がかったズボンと、戦時共産主義時代の想像を絶するようなジャケットを着たうえに、背中には

屑拾いにびつたりのリュックサックを背負って、たったひとりで電車に乗ってどこかへ出かけて行ったじゃない。セリョージャはこの件ではあれこれ言わなかった。そういう母親の姿をからかったり、陰で笑うことさえだれにも許さなかった。どうやら姑は、夫と、つまり数学教授だったセリョージャの父親とその昔一緒に歩きまわったところを訪れているらしかった。セリョージャの父親はたいした健脚で、旅行好きで、写真マニアだった。人民委員クルィレンコ時代の旅装束に身をつつんだ姑の姿は悲喜劇的だった。オリガ・ワシーリエヴナでさえいい気はしなかったし、イリンカにいたってはまったく心を痛めていた。近所のおばちゃんたちが井戸端会議で、おばあちゃんのことを物笑いの種にしてるのよ。セリョージャの父親は四一年に志願して義勇軍に加わり、その年の秋に、モスクワ近郊で戦死した。悲しい奇行のある老婆のことを理解することはできたのに、どうして彼女のことは、オリガ・ワシーリエヴナのこととは理解してくれなかったのだろう？ どうして彼女の悲しみをわかってはくれなかったのだろう？ 法律を学んだ決して馬鹿ではないこの女性、この姑に、オリガ・ワシーリエヴナにも苦悩する権利があることを認めさせることは、いかなる力をもってしてもできない話であった。

「どうぞ、お買いなさいな、テレビ。迷うことなんかありませんよ」オリガ・ワシーリエヴナが愚かにも相談してみようと思ったとき、姑はそう言った。

大きなテレビを買ってよとイリンカがしつこくねだっていた。オリガ・ワシーリエヴナにはどこでもよかったのだけれど、イリンカがいつもあれこれくだらない物を買いに寄っていた隣りの建